

前回会議（平成22年5月6日）における 京北病院の運営全般に関する各委員からの意見等

医師の確保について

- 現在診療にあたっている常勤医師が、熱意を持って取り組むことができる医療を実践し、地域医療の魅力を若い医師等に伝えることを、京北病院の医師確保の足がかりとするべきである。
- 医師の確保が困難な状況で、従来と同規模の病床や外来診療科を継続した場合、医師の疲弊感・負担感が増大し、ひいては、医療機能や医療の質の低下を招く恐れがある。いまいる貴重な常勤医師を疲弊させないように医療機能を維持していくのかを考えていく必要がある。
- 医師の確保が困難な中で、京北病院においては健康管理や介護を行い、重症患者はすべて市立病院で診療を行うという選択肢もあるが、京北病院の持っている今の資産を活用し、医師が元気にやりがいを持って地域医療に取り組むことができるようにすることが重要である。

京北病院の経営状況について

- 診療収入に占める人件費の割合が非常に高い状況で同じ形態を維持することは大変難しいが、地域の病院は経営ではなく、政策医療が中心である。

一般病床、亜急性期病床の適切な病床数について

- 一般病床のあり方として、訪問看護の件数が増加しており、（在宅療養中の患者が入院加療を要する状態になった場合に入院できる）亜急性期病床を含めた適切な一般病床数及び一般病床、亜急性期病床の比率を考えていく必要がある。
- 新臨床研修制度移行後、大学の医師数が大幅に減る中でも京都府北部への医療体制を維持するため医師派遣総数は維持しているが、直ちに京北病院へ医師を派遣することができる状況ではない。常勤医師数が現在の医師2人から増加する見込みがあれば、一般病床の現状維持もしくは微減で対応できる可能性はあるが、常勤医師2人で、外来も、救急も診たうえ一般病床の入院まで対応することが、医療の質の確保の観点から適切なのか考える必要がある。

救急医療について

救急からの入院患者数の状況、市立病院まで30キロという地理的状況を考慮して、どのような割り振りが適切なのか検討していく必要がある。

診療所について

（経営状況が厳しい中で）現在と同じ形態を維持することは大変難しいが、地域の病院は経営ではなく、政策医療が中心なので、施設設備や診療所4つを同じように維持するのかなど、地域住民の医療をいかに確保するか考えていく必要がある。

訪問看護について

訪問看護の件数が増加してきている。療養病床を老健施設に転換するに際し、看護師が従来行ってきた業務を介護士に変えることにより、少し余裕が出てくる看護師に地域での働きとしてやりがいのある訪問看護を担ってもらうことを検討する必要がある。

京北地域の医療・保健・福祉サービスについて

- 住民のニーズに応じて、医療サービス、保健サービス、福祉サービスを体系的に提供することが必要である。
- 保健師との連携を深め、活用を促進することで、京北病院が、地域の医療・保健・福祉の体系的なサービスを提供する機能の中核を担うべきである。